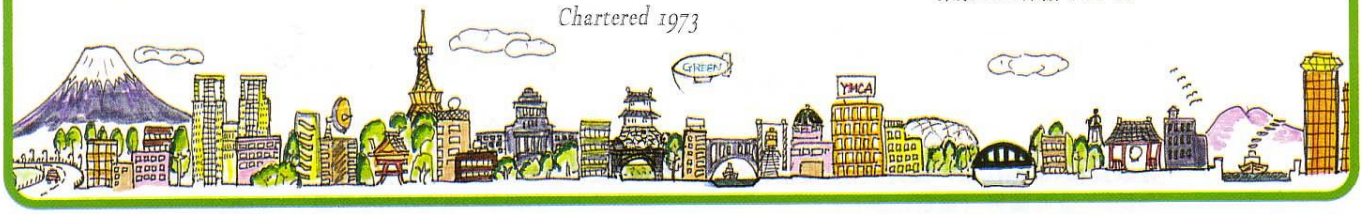
THE Y's MEN's CLUB of TOKYO GREEN
The Service Club Of The YMCA
VOL 2024.11.04

東京グリーン

〒135-0016
東京都江東区東陽 2-2-20
東京 YMCA 東陽町センター内

Chartered 1973



To Acknowledge the Duty that Accompanies Every Right

＜ 2024.11＞ BULLETIN 2024 年 7 月～2025 年 6 月

会　　長　樋口　順英
副 会 長　青木　方枝
書　　記　村杉　一榮
会　　計　小仁　恵子
監　　査　柿沼　敬喜
担当主事　柳原みずき

国際会長　A・シャナヴァスカーン　「太陽の輝きと笑顔」
アジア太平洋地域会長　ジョウン・ウォン　「大きなインパクトを起こそう」
東日本区理事　山田　公平　「ワイズの方向性を見極める」
関東東部部長　山本　剛史郎　「我々は微力かもしれないが、無力ではない！」
クラブ会長　樋口　順英　「元気で楽しいのが一番！」

11 月　収穫感謝祭

また、あなたが畑に種を蒔いて得た勤労の初穂を献げる刈り入れの祭りと、年の終わりに、あなたの勤労の実を畑から取り入れるときの収穫祭を行わなければならない。（ 出エジプト記 23 章 16 節）

＊初穂の時と、借入時には、その収穫を神に感謝しなさい。

２０２４年１１月例会

日時：2024年11月20日(水)18：00～20：00
場所：東京 YMCA　東陽町コミュニティーセンター
★進行：西澤メン、　受付：西本メン、

開会点鐘　樋口　会長
ワイズソング・ワイズの信条　全　員
会長挨拶　樋口　会長
ゲスト、ビジター紹介　樋口　会長
聖句・お祈り・食事　西澤　メン
ゲストスピーチ
卓話 「300円の奇跡」
ふじみ野市支え愛センター会長　北沢　紀史夫　様
各種報告　樋口　会長
YMCA　報告　柳原　主事
ハッピーバースデー　なし
閉会点鐘　樋口　会長

【例会出席率】在籍：15名　10月出席率7/13　54%
出席：10月　（メン7名、メネット0名）　計7名
【能登半島豪雨緊急支援募金】3クラブ合同で¥26,500

「デフリンピックでも頑張ります！」～佐野　守

私は現在、パラリンピックの卓球のコーチをしていますが、来年のデフリンピックのお手伝いもぜひできればと考えています。

来年 2025 年 11 月に、日本で初めてデフリンピック（聴覚障がい者のための国際的なスポーツ大会）が開催されます。東京都、静岡県、福島県が会場となり、70～80 の国と地域から約 3000 人の選手が東京に集結し、競技を行います。

デフリンピックとは、英語の「Deaf（きこえない人）」と「Olympics（オリンピック）」を組み合わせた名称です。オリンピックと同じく、4 年に一度の周期で夏季大会と冬季大会が交互に開催され、1924 年にフランスで初めて行われました。静かな世界での競技を通して無限の可能性を感じられる場として、多くの選手が集います。

大会のルールはオリンピックに準じていますが、聴覚障がいのある選手や観客が安全で快適にイベントを楽しむことができる環境が必要です。

まだまだ日本ではなじみがありませんので、これからPR していきたいです。

◆２０２４年１０月（３クラブ合同）例会報告

日　時：2024年10月17日(木)　19:00～21:00
場　所：東京 YMCA 東陽町コミュニティーセンター
出席者：青木、小仁、佐野、西澤、村杉、柳原、樋口各メン
ゲ ス ト：桑原　功一　様（渋沢史料館　館長）
ビジター：関東東部役員、山本部長はじめ7名
　　東京クラブ　長澤　弘　メン

▲　概要

昨年に引き続き、東京江東クラブ、東京ひがしクラブとの3クラブ合同例会を行ないました。

ゲストには、新一万円札発行にちなみ、日本の渋沢栄一研究の第一人者、桑原功一様（渋沢資料館館長）をお招きしました。ゲストを含め34名が出席しました。

鮎澤会長（ひがし）による開会点鐘、相川会長（江東）による開会挨拶につづき、能登半島豪雨緊急支援募金、山本関東東部部長挨拶、聖句、食前のお祈りと続きました。

食事後、桑原様による卓話は、斬新なテーマで、史料に基づく深い考察、巧みな話しぶりに引きつけられ、あっという間に時間となりました。2次会でも話が尽きることなく、大いに盛り上がりました。

▲関東東部部長挨拶（山本剛史郎メン）

川越クラブに入会し活動を続け、そろそろやめようかなと思った頃、関東東部や東日本区の役員になり多くの人とのつながりができて楽しくなり、今日に至ります。ワイズ活動はこれからもみんなで続けていきたいものです。

▲卓話　桑原　功一　様（渋沢史料館　館長）

卓題「**渋沢栄一と東京の街つくり**」

【写真上、熱く講演する桑原功一氏】

<要旨>

(1) 渋沢栄一は、約500社の会社を設立するが、教育、国際交流にも貢献した。同時に東京の街づくりにも貢献し、東京のインフラ整備、福祉・教育のハード、ソフト構築に尽力した。

(2) 彼が1867-68年欧州歴訪し学んだことは、官と民がお互いを尊重し力を合わせる社会づくりであった。

(3) 1874年(明治6)大蔵省を辞職し、同年第一国立銀行（現みずほ銀行）を立ち上げる一方、翌1875年には東京会議所共有金取締となり、維新後東京に引き継がれた江戸町会所の積立金(共有金)の運営に関与し、東京の街づくりに係わることになる。

(4) ガス灯事業
1875年(明治7)から市中各所にガス灯を設置する一方、電灯の普及にも努めた。

(5) 養育院の管理運営
① 東京市は1873年(明治5)養育院を設置し生活困窮者を保護を行ったが、栄一は現場に行き、子供たちに厳しく接する主任たちを見て、親の気持ちで子供たちに接するようにしたら子供の顔つきが変わっていくのを目の当たりにして、養育院の運営にのめりこんでいく。
② 以来60年間福祉事業に携わり、養育院で育ったのち社会に出て働けるようにするしくみとして企業と養育院を結びつけたり、子供と大人を分けて生活させるようにした。

(6) 商法講習所―商業教育に尽力―
① 森有礼が明治8年私塾「商法講習所」を設立していたが、清国に赴任することになり栄一が引き継いだ。
② やがて存続の危機が訪れるが、商業教育の必要性を訴えてこれを乗り越える。

(7) 近代都市東京をどういう都市にするのか？
① 東京を産業都市にすべきと考え、東京深川を物流拠点とし、金融、海運、倉庫、保険業などを総合的に考え、全国物流構想を描いた。
② 市街地改造・道路幅の見直し、とともに大型船が接岸できる東京港の築港を提案した。

(8) 街づくりをするのに大切なのは、人と人とが結びつき発展していくことだ。国と民が一緒になって一人一人ががんばってよい社会を作っていくことを常に考えた人であった。　（村杉　記）

▲　ハッピーバースデー：

柿沼澄子、古平邦子、高谷禎宣、各メン

◆第９０回神田川船の会報告　10月12日(土)

【写真上、小名木川をガイドする早瀬メン】

神田川船の会はことし設立45周年を迎えました。例年になく気温上昇、晴天の中、110名のお客様をお迎えし、午前、午後各2隻で周遊しました。

安全運航に徹していただいた三浦屋さんおよび、テント設営、受付等バックオフィスでご尽力いただいた東京 YMCA の皆様に感謝致します。

参加者：青木、柿沼、小仁、高谷、早瀬、樋口、柳原各メン

【写真上、神田川を航行する粋人丸（新倉船長）】

◆ＤＢＣ京都パレスクラブとの交流会

神田川船の会には、2年ぶりに DBC 京都パレスクラブメンバー9名の方々に午後便に乗船いただきました。

下船後、となり町、両国の味のいい中華料理屋さん「香港楼」にて親交を深めました。

【写真上、浅草橋・船宿「三浦屋」にて】

（樋口　記）

◆昌平小学校船上学習報告　10月2日(水)

秋晴れのもと恒例の昌平小学校船上学習を行いました。水の大切さを訴えながら、川からみえる江戸・東京の社会や歴史を説明しました。小学4年生生徒さん54名は歓声がたえず、楽しい学習のひとときでした。（9月24日(火)事前学習）

【写真左、船に乗り込む】【写真右、ドローンがお出迎え】

◆関東東部大会出席報告　10月19日（土）

【写真上、左から樋口、佐野、山本、村杉、青木各メン】

10月19日（土）ウェスタ川越においてワイズメンズクラブ関東東部大会が行われ、総勢56名が出席しました。（当クラブは、青木、佐野、村杉、樋口各メン出席）

Creative Arts Tokyo によるミュージカルが上演されました。コミカルではあるがやや辛口で、ワイズや当クラブにとっても示唆に富んだ意味深い劇でした。

（樋口　記）

◆東京八王子クラブ３０周年記念例会報告

10月26日（土）八王子エルシイにおいて東京八王子クラブ30周年記念例会が開催され、95名が出席ました。（グリーンは、青木、柿沼、村杉、樋口各メン出席）

ご来賓のお祝辞を伺い、記念誌に触れ、チャリティーコンサート、IBC、ひつじ雲交流など立派な実績の裏には、メンバー各位の強い自己実現モチベがあることがよくわかり、いい勉強になりました。　（樋口　記）

◆２０２４年１１月第二例会(役員会)議題

日時:2024年11月13日(水) 15:00～17:00 Zoom

1. 11月16日(土) 関東東部評議会提出資料審議
2. 12月8日(日)クリスマスオープンハウスの打合せ
3. 12月18日(水)クリスマス例会準備

◆今後の主なスケジュール

1) 11月13日(水) 11月第二例会(Z)15:00～
2) 11月16日(土) 関東東部評議会(東陽町)
3) 11月20日(水) 11月例会(東陽町)18:00～
4) 12月 1日(日) 川越クラブ25周年記念例会
5) 12月 8日(日) クリスマスオープンハウス(東陽町)
6) 12月11日(水) 12月第二例会(Z)15:00～
7) 12月18日(水) 12月クリスマス例会(場所未定)
8) 1月 8日(水) 1月第二例会(Z)15:00～
9) 1月11日(土) 在京ワイズ合同新年会(東陽町)
10) 1月15日(水) 1月新年例会(東陽町)18:00～

◆特別寄稿 (西澤 紘一)

第８９６回東京ＹＭＣＡ早天祈祷会「奨励」

このたび伝統ある早天祈祷会において、当クラブの西澤紘一メンが「奨励」(会員有志が聖書について自分の考えなどを語ること)を行いました。
日時:2024年10月１日 7:00～8:00
会場:東京山手 YMCA コミュニティーセンター/オンライン
その全文を寄稿いただきましたので、以下掲載させていただきます。

聖句:マタイによる福音書6章33節～34節

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、みな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは、明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

『神の国と神の義を求めなさい』

―メレル・ボーリズに学ぶー

一柳 米来留氏(William Merrell Vories、ひとつやなぎ めれる)が逝去されて今年で 60 年目に当たる。

彼は、我が国における西洋風建築の祖の一人とも言われ、同時にキリスト教の宣教師、日本における YMCA 創設者でもあった。さらに製薬業界の黎明期に万能薬『メンソレータム』の製造販売を始め、経営者としても一流であった。その上、病院、図書館、学校など社会事業にも力を尽くした。また、音楽にも秀でており、オルガンの名手であった。彼の作曲した讃美歌も有名である。

実は私が京大学生 YMCA のメンバであった時、実家のある滋賀県近江八幡 YMCA に繁く出入りしていた。その時、YMCA の主事をしておられた林治郎さんに可愛がってもらっていた。一回り年上であった林さんは、私達若い者の兄貴分であり、何かと理由をつけて毎日のように彼の住む寮にお邪魔して、深夜までお酒を飲み、話をしたり、歌を歌ったりして青春を謳歌したものである。私の恩師であり先輩である林治郎さんは、大学卒業後近江兄弟社に入社されて、近江ミッションの系列である近江八幡 YMCA で働かれていた。

林さんからよく聞かされた話は、 ウイリアム・メレル・ボーリズさんの生涯であった。林さんは、ボーリズさんから直接薫陶を受けられた第 1 世代の愛弟子の一人であった。私自身も幼稚園、小学校は近江兄弟社学園に通ったので、ボーリズさんがまだ元気な頃の姿をかすかに覚えている。私が大学の 4 年生の時、病気療養中に召天されて、近江八幡市、近江兄弟社のグループによる盛大な葬儀に参列したことを思い出す。そして今年が逝去後 60 年に当たる。

ボーリズさんは、コロラド大学で建築学を学んだが、幼い時からキリスト教の影響を受け大学在学時には YMCA 活動(1844 年創立)のリーダーであり地域の奉仕活動にも熱心であった。大学の夏休み中に参加したワークキャンプで信仰に目覚め、神学部を学び直し、1904年大学卒業後、どこかアジアの国でキリスト教伝道に携わりたいという志を持っていた。その頃、日本の明治政府は、地方の中学、高校(専門学校)に外国から英語教師を招聘して、生徒に生きた英語を学ばせ世界で活躍できる人材の養成に力を入れていた。私の故郷である近江八幡でも、近江商人を多く輩出してきた県立八幡商業学校に英語科座を作ることになり、東京YMCAを介して、米国から英語教師を招聘したい旨を伝えていた。ボーリズさんは、このYMCAを通して、八幡商業学校英語教師として赴任することとなった。誠に不思議なご縁である。

ボストンバッグに生活必需品を詰め込んで、単身太平洋を越えて滋賀県の片田舎近江八幡に着いたのは、1905 年(明治 38 年)2 月 2 日であった。冬の殺伐とした田舎の駅に着いた時、彼の心細さには、想像にあまりある。あらかじめ用意されていた下宿で遠かった旅の疲れを癒して、早速学校に出かけると大変歓迎されたそうだ。しかし、同便で送ったはずの彼のスーツケースが何日たっても届かない。学校を通して調べてみると、何と九州の八幡市に着いていたそうだ。このボーリズさんのエピソードは、よく聞かされた。ボ―リスさんが、八幡商業校で英語の授業を始めると、生来の明るさとユーモアで、すぐに学生や同僚教師から絶大な信頼を得て、もの珍しさも手伝って近江八幡の名物男と

(次ページにつづく)

なったそうである。しばらくして、彼は学生たちを自分の下宿に呼び、英会話を教え始めた。やがてキリスト教の基本、聖書を語るようになっていた。若い知識欲に燃えた生徒たちは、水が乾いた土地に吸い込まれるようにキリストの言葉が彼らの心に浸みこんでいったようである。そして、多くの受洗者を作った。当時の教え子の中からボーリスさんの夢に協力する弟子たちも生まれてきた。ところが、彼の熱心な教育・伝道活動に不快感を示した保護者や文部省当局が宗教教育を止めるように何度も警告し、それを無視したがゆえに僅か 2 年後には、彼は解雇されてしまう。彼は、職を失い、土地の人からも非難され、窮地に陥ったが、近江八幡を離れる気はしなかった。彼にとって、琵琶湖はガリラヤ湖に似ており、それでも慕ってくれる生徒たちを見捨てることができなかったのである。退職後 1907 年自ら近江八幡 YMCA を設立し、社会活動を開始すると共に琵琶湖湖畔でのキャンプに誘い、当時あまり楽しみの無かった子供たちに水泳を教え、野外の楽しさを教えた。そして、彼はこの地を神の国にすると誓った。彼の旗印として丸の中央に点を打つ、丸の中央に点を描いたものがトレードマークであり、この点が、世界の中心であり、神の国近江八幡だといつも語っていた。

生活の糧を失ったボーリズさんは、大学で学んだ建築学を生かして建物の修理から、リフォーム、新しい建築物の設計施工ビジネスを始めた。ボーリズ建築事務所は、今や一粒社として良く知られており、我が国における西洋建築の租とも言われ全国に多くの建築物を残している。ボーリズさんが夢見た神の国建設の第 1 歩が、この建築ビジネスであった。糊口を満たすことができるようになると、本格的な伝道を進めるためには、資金が必要だと言うことになった。ボーリズさんは、米国に戻り寄付金を集めることに心を砕いた。その中の 1 人が、アルバート・アレキサンダー・ハイド氏であった。彼は、クスノキに含まれている樟脳（メントール）をワセリンに混ぜる方式で当時の万能家庭薬、風邪にも効く塗薬（メンソレータム）の発明者であった。当時ハイド氏も熱心なクリスチャンであり、教会への奉仕に余念がなかった。後年、牧師がハイド氏に尋ねたそうである。『大きな金額を教会に献金していただくのはありがたいのですが、あなたの生活は大丈夫ですか』 するとハイド氏は『ビジネスがうまく行かなかったときは、十分の一献金をするのも大変でした。今は、ビジネスも大きくなり余裕が出てきました。私の生活を支える金額以外は、すべて神様に捧げているのです』おそらく、ボーリズさんは、このハイド氏から『十分の一献金』の精神を受け継ぎ、ビジネスと信仰との融合を考えたのであろう。当時、ハイド氏が興したメンソレータム社の本社工場が、ニューヨーク州の北の端、バッファローにあり、ボーリズさんが日本伝道で苦労していることを知って東洋におけるメンソレータムの販売権を譲渡したのである。

ボーリズさんは、近江セールス会社立ち上げ、このビジネスに参入、大きな資金を得てその収益をもって神の国建設を始めたのである。後年、YMCA から近江兄弟社に異動しボーリズさんの勧めで製薬技術を学ぶためにこのバッファロー留学をされたそうだ。そこで、よき伝統であるキリスト教文化に触れられて教育者としても優れた資質を発揮されることとなった。その後ボーリズさんは、近江八幡に製造会社を設立し万能薬メンソレータムの製造販売を始めた。皮膚炎に効くばかりか、蒸気を吸い込むと喉の痛みも消えるなど万能薬として瞬く間に全国に普及していった。ハイド氏との約束通り、その収益の十分の一は、病院、図書館、YMCA、学校など社会インフラへの投資を惜しまなかった。今の近江八幡市の施設の多くは、ボーリズさんのアセットである。ボーリズさん亡き後は、高度経済成長が始まるとともに、信仰とビジネスのバランスを取ることが困難となり、結局ビジネスも行き詰まってロート製薬に商権を譲渡することとなってしまい残念である。

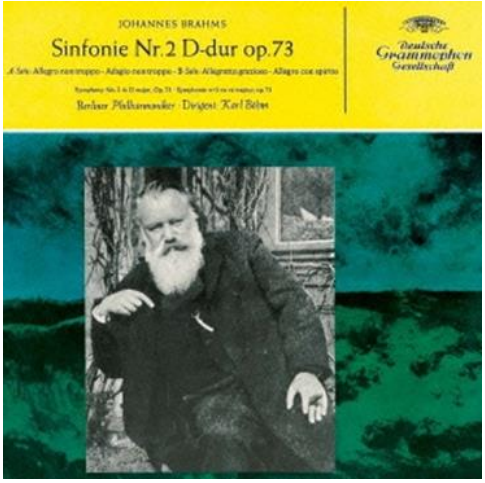
林治郎さんは、ボーリズ時代を生きた人であり、いわば近江ミッションンの後継者、第 2 世代と言っても良い。彼の薫陶を直接体験されたからである。その後、近江兄弟社を辞されて、日本レダリー社の社長を務められて、ビジネス上でも成功されたが、同時に YMCA への貢献も大きかった。毎年、東山荘ファミリーキャンプにも参加され、いつも YMCA への貢献と奉仕を怠らなかった。私は、ボーリズ先生の第 3 世代にあたり、彼の精神を受け継ぎ、孫子へ語り続けたいと思っている。

林さんは、ビジネスの第 1 線から退かれた後も、ワイズメンズクラブ、地域の奉仕活動など、細かく社会活動をされていた。林さんは、今年の 5 月、ボーリズさん没後 60 年目に、眠るように天に召された。今は安らかに富士山の見える東山壮近くの墓地に眠っておられる。私は、近江八幡 YMCA に繋がるボーリズさんと林治郎さんとの出会いがあった恵みを感謝し、彼らが神の国を作るのだと言う理想に燃えて、あの保守的な浄土真宗で凝り固まった田舎町を『神の国』に変えた、少なくとも神の国精神を根付かせた奇跡は忘れられない。今や、ボーリズさんは近江八幡市の名誉市民第 1 号であり、彼を知らない市民はいない。神の義と神の国を求めなさいと教えたボーリズ精神、それを引き継いだ多くの人たち、その中でも林治郎さんは、ボーリズさんの愛弟子の一人として共に働き、近江八幡でも東京の地でも YMCA を愛し善きサマリヤ人として、生涯を全うされた事に敬意を表したい。

【写真右は
西澤紘一メン】

VIVA CLASSICAL

深まる秋にこそ、元気爆発!!
ブラームスの交響曲第２番



ヨハネス・ブラームス作曲（1833～1897）
交響曲 第2番ニ長調 作品73(1877)
指揮：カール・ベーム（1894-1981）
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（1956 録音）

この曲は、長年の懸案であった交響曲第1番を完成させた翌年の夏、オーストリア南端の避暑地で、まるで肩の荷が下りたかのように、たった3か月で一気に作曲されました。幸福感あふれ、元気の出る曲です。

第1楽章：出だしのホルンののどかなフレーズは、オーストリアアルプス山麓の閑散とした風景を思い起こします。続いてなかなかエグみのある子守歌のようなフレーズが登場し、お互いが絶妙に変化しながら、終始明るい雰囲気で曲が進行し、次第に夕日が沈むように終わります。

第2楽章：すこし緊張気味のチェロではじまる素朴なメロディーは、ブラームス自身「生涯でいちばん美しい旋律」と語ったと言われるものです。彼は、日が暮れて、気難しそうな顔で物思いにふけるのでしょうか。

第3楽章：気分が晴れ、やさしい感じの短い曲です。オーボエによる可愛い三拍子のフレーズが3度でてきて、その間隙にサンドイッチの具のように変奏曲が入ります。

第4楽章：第1主題のフレーズが、出だしは弱い音で奏でられますが、いきなり歓喜が大爆発し、目が覚めます。次に幸福そうな第2主題フレーズが出てホッと落ち着きを取戻します。が、だんだん熱気がエスカレートしていき、最後は2つのフレーズが合体し緊張感をもって元気よくジャアーーンと終わります。

思い出 CD：巨匠カール・ベーム壮年期（62才）ベルリン・フィルによるモノラル録音です。飾り心のない真っ直ぐな演奏に心が打たれます。　（樋口　記）

YMCA コーナー

1. 9 月 21 日～22 日に石川県能登地方を襲った記録的豪雨の被災者支援のため、全国YMCAでは「2024 年 9 月能登半島豪雨緊急支援募金」を一斉に開始した。東京YMCAは 10 月に 2 回、高田馬場駅周辺及び東雲地区で街頭募金を行い、延べ 61 名が参加し合計 166,863 円の募金が集まった。
   また全国YMCAと連携し、輪島市町野町へのボランティア派遣を開始した。10 月末までに約 30 名（全国YMCAでは約 100 名）の学生ボランティア、スタッフが支援活動に従事する予定。
2. 10 月 4 日、東京YMCA高等学院では、「10 周年＋1 記念コンサート」を日本基督教団霊南坂教会で開催し、約 70 名が来場した。
   飯靖子氏のオルガン、飯顕氏のヴィオラ演奏の他、スタッフや関係者、生徒によるトーンチャイムの演奏も披露された。
   第2部では、手作り品のバザーや 11 年の歩みを振り返る時を持った。
3. 10 月 12 日、東陽町コミュニティー委員会の主催で「下町こどもダイニング」と「フードパントリー」の記念感謝会が開催され、53 名が参加した。同プログラムに継続的支援をいただいている 15 の企業・団体と 16 名の個人に感謝の記念品が贈られた。
4. 今後の主な行事予定
   1)「国際協力一斉街頭募金」11月 2 日 （新宿駅周辺）
   2)「YMCA・YWCA合同祈祷週礼拝」11月14日（東京YWCAカフマンホール）
      ・メッセージ：堀　光雄牧師
      （東京YWCA、在日本韓国YMCAと共催）
   3)「第 23 回日本YMCA大会」 11 月 15 日～17 日（YMCA東山荘）
      ・大会テーマ：
         「Link!～[私]、YMCA、世界、そして未来～」
   4)「第 26 回愛恵エッセイ」 11 月 15 日まで作品募集（愛恵福祉支援財団との共催）
      ・テーマ：
         豊かな福祉社会を創るために―戦後 80 年になるんだって！？」
   5)「賛助会年会・アドバイザー会」 11 月 26 日（学士会館）　　（クラブ担当主事：柳原　記）